

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 20 日現在

機関番号：32707

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381142

研究課題名(和文) 多文化家庭の子育て戦略の課題 -日韓中の国際カップルへのインタビュー調査

研究課題名(英文) Educational strategy of intermarried Japanese, Korean, and Chinese couples

研究代表者

渡辺 幸倫 (Watanabe, Yukinori)

相模女子大学・学芸学部・准教授

研究者番号：60449113

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、日本、韓国、中国に居住する多文化家庭の子育て戦略の特徴を明らかにすることであった。調査対象者は、日本在住の日中、日韓カップル、韓国在住の韓日、韓中カップル、中国在住の中日、中韓カップルとし、「子育て」という一定の枠組みの中で課題を探索するために半構造化インタビューとし、約50人へのインタビューを行った。分析は語られた内容を単位にテーマごとに分類し、項目ごとの相互関係や全体像についての考察を行った。論点の一部を示せば、韓国在住の日本人父親が示す「ムコ意識」、日本人母親による自己実現のための日本語教育グループ運営、日本語教育の外注化としての日本人学校選択などがあがった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to describe how educational strategy is constructed in order to elicit suggestions for the future direction of education in international families with children at a lower school age. To do so, we have conducted interviews with Japanese-Korean, Japanese-Chinese, and Korean-Chinese couples in Japan, Korea, and China. There were approximately 50 participants. The main questions addressed the following two areas: language education and school choice. The interview transcripts were analyzed to identify underlying themes across the interviews. The study identified several important features. For example, for Japanese in Korea, 1) husbands often adopt a behavior-conscious attitude to fit in with their wife's families, 2) The mothers organize language education study groups for their own fulfillment 3) Japanese schools are selected as an outsourcing option for Japanese language education.

研究分野：教育社会学

キーワード：多文化教育 国際結婚 国際理解 教育戦略 恋愛結婚 国際研究者交流 家族・家庭

1. 研究開始当初の背景

(1) 厚生労働省の人口動態調査(2015)では、日本人の全結婚数のうち「夫妻の一方が外国籍」の割合の推移をみる事ができる。同調査によれば、1985年の1.66%から、1990年に3.55%、2000年には4.7%を記録し、2006年にピーク(6.11%)を迎え、データ中最新の2014年には3.28%であった。国際結婚は、ここ20年ほどのうちに日本の結婚形態の一つとして定着したと見てよいだろう。なかでも中国出身者や韓国出身者との結婚数の割合は高く、両者を合わせると期間中の国際結婚の半数以上を占めている。これに伴って日本で子育てする日中・日韓の国際カップルは急増しており、そのうちの多くが言語・文化教育の観点から子育てに戸惑いを感じている。

(2) 研究の土台は、著者らが中心となって行った渡辺(2012)『新宿のニューカマー韓国人のライフヒストリー記録集の作成—顔の見える地域づくりのための基礎作業』にある。同研究は、日本社会に生きる100人のニューカマー韓国人のライフヒストリーを収集し、アクセスしやすいように編集した上で、地域社会への還元を念頭に日本語と韓国語で発信するというものであった。インタビューでは各人の人生の中で重要であった数々の出来事が語られたが、なかでも子育ての問題は最重要項目の一つであった。これは一般にいわれる「教育熱心な韓国人」という言説と通じるものではあったが、韓国人同士の家庭と韓国人と日本人の「多文化家庭」で異なる子育て上の課題に直面しているという興味深い事例が一部観察された。これが本研究の出発点となった。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、日本、韓国、中国に居住する多文化家庭の子育て戦略の特徴を明らかにすることである。いまだ記憶に新しい2012年の東アジアの政治的葛藤はこれらの国際カップルにも大きな衝撃を与えた。国際結婚の配偶者出身国の上位はまさにこの葛藤の相手国であり、多くの家庭で対応に苦慮したであろうことは容易に推測できる。これらの家庭の子どもたちは東アジア全体の未来を開く鍵となる事は間違いない。このような子どもたちが今どのように育てられようとしているのかを知る事、また国際結婚カップルの築く多文化家庭の内実を理解することは、今後の東アジア全

体の安定を模索するためにも重要な意義を持つだろう。

3. 研究の方法

(1) 本研究の調査法としては、上述の『新宿のニューカマー韓国人のライフヒストリー記録集の作成』で使用したインタビュー方法を修正し採用した。具体的には、「子育て」という一定の枠組みの中で課題を探索するために半構造化インタビューとし、言語教育、学校選択、両国の葛藤についての子どもへの示し方などを軸に1.5から3時間程度語ってもらった。インタビューは録音の上、文字化し、分析は語られた内容を単位にテーマごとに分類し、項目ごとの相互関係や全体像についての考察を行った。

(2) 調査対象者は、日本在住の日中、日韓カップル、韓国在住の韓日、韓中カップル、中国在住の日中、中韓カップルとした。ほぼ同時期に行われたインタビューを分析することで、各国の同時代的な状況と各家庭の戦略の現代的な特徴を探究した。

(3) 共同研究者5人がそれぞれの性別や母語を軸に主担当を決め、主担当を置かない対象者については、全員で取り組むこととした。居住地、国籍、性別の組み合わせごとに2人、全48人を目標としたが、可能な組み合わせでは目標にかかわらずインタビューを行った。インタビューの対象者は共同研究者それぞれの人脈を生かし、スノーボール式で広めていった。

4. 研究成果

(1) 結果としては、全46人へのインタビューを行うことができた(表1)が、すべての組み合わせを満たすことはできなかった(特に中国人男性にかかわる組み合わせ)。調査開始時から中国人男性と日本人、韓国人女性との組み合わせの数が統計的に少ないことはわかっていたものの、期間中に十分に得られなかったことは残念であった。しかし、全体としては目標を大きく超えて収集できた組み合わせもあり、十分な成果を上げることができたといえるだろう。ただし、一般に、スノーボールサンプリングの特徴として、サンプリングの対象者が紹介者の人間関係を反映しやすい点があげられる。本調査でも、著者らの属性を反映してか、結果として対象者にはいわゆる中間層、ミドルクラスの人々が多かった。以下にその組み合わせを表、および考察によって浮かび上がってきた論点を提示する。

表1 インタビュー対象者全体の組み合わせ

| 居住地 | カップル | インタビュー対象者 | 実施人数 | インタビュー対象者 | 実施人数 |
|-----|------|-----------|------|-----------|------|
| 日本 | 日韓 | 日本人夫 | 1 | 韓国人夫 | 1 |
| | | 韓国人妻 | 2 | 日本人妻 | 2 |
| | 日中 | 日本人夫 | 2 | 中国人夫 | 1 |
| | | 中国人妻 | 5 | 日本人妻 | 0 |
| 韓国 | 韓日 | 韓国人夫 | 3 | 日本人夫 | 5 |
| | | 日本人妻 | 9 | 韓国人妻 | 1 |
| | 韓中 | 韓国人夫 | 3 | 中国人夫 | 0 |
| | | 中国人妻 | 2 | 韓国人妻 | 0 |
| 中国 | 中日 | 中国人夫 | 0 | 日本人夫 | 4 |
| | | 日本人妻 | 2 | 中国人妻 | 3 |
| | 中韓 | 中国人夫 | 0 | 韓国人夫 | 0 |
| | | 韓国人妻 | 0 | 中国人妻 | 0 |

(2) 日本人の父親たちにとって子どもの教育戦略の策定は、子どもの将来に対する投資的要素や妻の自己実現などが考慮されることは言うまでもないが、むしろ自身の仕事や稼ぎ手としての父親の自己実現が重要な要素としてある。特に中国・韓国に居住する父親たちの間では、中国や韓国への好感と尊重を基礎にした「ムコ」意識がみられていた。さらに、父親自身の居住国への適応経験への自負心が子どもの教育を取り巻く現状に対する評価の基準として作用していた。しかし、一方でインタビューの中では、日本で変化する性別役割分担意識に敏感に反映したような男性の子育て参加についての話題も好ましいものとして多く語られていた。これは、多文化家庭の父親たちの教育観が単に、自らの経験の再生産をしているわけではなく、新たな言説によって十分に変化する可能性を示しているのではないだろうか。(渡辺)

(3) 調査対象となった韓国に住む日本人母親たちにとっては、個々人の現在の言語能力よりも、結婚前に留学の経験があるかどうかという点により、子どもに対する教育戦略に関しての具体性が異なっていた。これに関して現時点で言えることは、「留学」によりアイデンティティの揺れ、つまり、留学先での「外国人」「留学生」などの社会的属性、いわば、社会的アイデンティティを付与された経験を持つ人とそうでない人との違いが、教育戦略においても異なるのではないかと推測される。そこでは、子育てという「新しい経験」にあたって、新しい、もしくは、異なる文化の対処の仕方に慣れていくかどうかという点で、個人の経験値として異なるのではないかと考えられる。国際結婚において、個人と社会の関係性をどのように捉え、どのように自分の位置を見出せるか。これが、国際結婚をし、さらに親となるというような可変性の高い場合、子育てにも関わってくるだろう。(藤田ラウンド)

(4) 国際結婚家庭の言語教育と学校選択に関連しては以下のような知見を得られた。まず移住者側は子どもへの自身の言語と文化の伝授(教育)を相当程度意識していた。これは移住した側が父親か母親かと関係なく観察された。次に、家庭内の言語教育の実践において外注化がみられた。これは特にソウル日本人学校に子どもを通学させている家庭で観察されたもので一般化には限界があるが、国際結婚家庭における言語教育の一つの形態として注目されよう。最後に、多くの親が子どもの将来について現居住国や出身国に限定しないグローバルな視点を持ち得ていた点を指摘したい。移住した親の多くは自身の言語や文化を教えることを「継承」より多様な言語と文化の取得と捉えていた。ただしこれらの点については今回の調査対象がすべて仲介業者を介しない恋愛結婚であること、夫婦間でどちらかの配偶者の言語を習得してコミュニケーションに不自由がないこと、さらにいずれの家庭も移住した側の母国を年1、2度は訪問できる程度の経済的な余裕があることなどを考慮に入れる必要があるだろう。(宣)

(5) インタビューでは、どのカップルも共通して父親の不在(子育てに協力しようとする父親の意思とは別に社会環境が厳しい部分も多い)を語っていた。そして、婿の立場であるか、嫁の立場であるか、どこに居住するかといった事項だけでなく、また韓国的な家父長制度、儒教、家庭の意思決定プロセス、性別役割分担なども家族、親戚との関係性づくりや家族間のコミュニケーションの形、自分の意見の表し方等において影響を与えていることが見えてきた。これが時に「夫婦間で文化的に次元の異なる考えをもっていると感じている」ことにつながっていることも窺えた。グローバル、越境する社会とはいえ、人々の認識、特に結婚という家族の結合についての考え方は社会の習慣を多く含む部分である。現在、韓国内における国際結婚が急増するなか、これらの認識についての学びは欠かせない課題であり、マジョリティを含む社会における教育の必要性は切実である。(李)

(6) 今回対象となった日本人・韓国人と結婚した中国人母親たちは、すべて経済的理由などが主導する「南北間型」国際結婚ではなく、いわゆる人的な交流を発端とする「文化交流型」国際結婚であった。すでに多くの実証研究により、このような結婚に至った母親の教育背景、社会ないし家庭での地位が子育ての態度や方式へ大きな影響を与えることが明らかになっているが、今回の

研究対象となった中国人母親たちの子育てへの意識にも彼女らの持つ学歴背景、留学ないし仕事経験がかかわっていた。これらを踏まえて母親の語りから国際結婚家庭の教育戦略について、「就学選択」及び「言語教育」の二つの観点から分析を行った結果、「生活」と「父親」が子どもの就学選択に影響を与えていることが確認された。また、言語教育戦略には「現地意識」、「エスニック・アイデンティティ維持」、「国際視野」が働いていること、さらに中国の家族との関係も言語教育に影響を与えていることなどがわかった。(裘)

(7)以上、調査の概要を取りまとめ、いくつかの論点を示した。あくまで現段階でのまとめであるが、これらの論点が東アジア三国の多文化家庭の子育て戦略の課題の考察や次世代を担う子どもたちの成長を考える際の一助となれば幸いである。今後は、助成期間中に得られた情報を精査して、論文等の形で発表したい。

<引用文献>

渡辺幸倫編著 (2012)『新宿のニューカマー韓国人のライフヒストリー記録集の作成—顔の見える地域づくりのための基礎作業最終報告書』トヨタ研究財団 2009 年度助成研究 (D09-R-0422)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① 渡辺幸倫、藤田ラウンド幸世、宣元錫「国際結婚家庭の子育て戦略—韓国在住韓日カップルの日本人「父親」と「母親」の語りから」『相模女子大学紀要』79号, 2016, pp. 9-24
- ② 渡辺幸倫、藤田ラウンド幸世、宣元錫、李埤鉉、裘曉蘭「多文化家庭の子育て戦略の課題—日韓中の国際カップルへのインタビュー調査」『相模女子大学文化研究』34号, 2016, pp.1-26

[学会発表] (計 9 件)

- ① 渡辺幸倫「国際カップルの子育て戦略—日本人父親の視点から」多文化社会研究会、2016年5月14日
- ② 宣元錫「国際結婚家庭の言語教育」多文化社会研究会、2016年5月14日

- ③ 藤田ラウンド幸世「韓国在住の日本人母親：就学前の教育戦略」多文化社会研究会、2016年5月14日

- ④ 渡辺幸倫「多文化家庭の子育て戦略(1)：韓国在住の日本人父親の語りによる日韓国際結婚カップルの子育てについて」韓国国際理解教育学会(江原大学(韓国))、2015年10月31日—11月1日

- ⑤ 藤田ラウンド幸世、宣元錫「多文化家庭の子育て戦略(2)：日韓国際結婚カップルの妻日本人の言語教育実践」韓国国際理解教育学会(江原大学(韓国))、2015年10月31日—11月1日

- ⑥ 渡辺幸倫、藤田ラウンド幸世「国際結婚家庭の子育て戦略—韓国在住の日韓カップルの語りから—」日本国際教育学会(相模女子大学)、2015年9月12日—13日

- ⑦ 渡辺幸倫「多文化家庭の子育て戦略:中国・韓国に住む日本人父親の視点から」日本国際理解教育学会(中央大学)、2015年6月12日—13日

- ⑧ 渡辺幸倫「国際カップルの子育て戦略—日中韓三国間の国際結婚カップルを中心に」日本国際理解教育学会(広島経済大学)、2013年7月6日—7日

- ⑨ WATANABE, Yukinori, “Children’s Creativity and Multicultural Family: Analysis of Narratives of Cross-married Japanese Fathers in Japan, China, and South Korea”第九届上海“为了孩子”国际论坛邀/ The Ninth Shanghai International Forum for Children (上海), 2013年9月27日(招待講演)

[図書] (計 1 件)

- ① 渡辺幸倫「日本の多文化家庭の子育て課題—中国人、韓国人を妻とした日本人夫の語りから」川村千鶴子編著『多文化社会の教育課題—学びの多様性と学習権の保障』明石書店、2014年、pp. 258-279.

[産業財産権]

- 出願状況 (計 件)
- 取得状況 (計 件)

[その他]

ホームページ等

多文化家庭の子育て戦略の課題 ー日韓中の国際カップルへのインタビュー調査

<https://tabunkakosodate.wordpress.com/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

渡辺 幸倫 (WATANABE, Yukinori)

相模女子大学・学芸学部・准教授

研究者番号：60449113

(2)研究分担者

藤田ラウンド幸世 (FUJITA-ROUND, Sachiyo)

立教大学・異文化コミュニケーション研究科・准教授

研究者番号：60383535

宣元錫 (SUN, Wonsuk)

大阪経済法科大学・公私立大学の部局等・研究員

研究者番号：10466906

(3)研究協力者

李埤鉉 (LEE, Hohyun)

早稲田大学非常勤講師

裘曉蘭 (QIU, Xiaolan)

上海社会科学院研究員